

# 茅野市民館のつくりかた

# 茅野市民館の位置

## 1) 概要

2005年10月に開館

株式会社地域文化創造(茅野市が100%出資)  
が運営。

年間総予算は約1億4000万円

事業予算はホールのみで700万円前後、それに  
補助金を獲得して2000万円以上の予算を確保。

建設の経緯は

<http://www.city.chino.lg.jp/ctg/01060172/01060172.html>

## 2) 複合施設

二つのホール・美術館・市民ギャラリー・ロビー・中庭・イベントスペースが有機的に配置された全国でも稀な施設。

法的根拠が異なり対立することも多い諸施設を、重なり合うスタッフが運営。

→企画においても関連した催事を実施

## 《参考》複合施設の増加

図書館とホール機能の複合のほかにも

- ・美術館が劇場を持つケース

  - 高知県立美術館ホール(1995年)

  - 青森県立美術館シアター(2005年)

- ・ホールと公民館の併設

  - 松山市総合コミュニティセンター(1987年)

  - 西条市総合文化会館(1996年)

- ・劇場・美術館等の複合施設

  - 水戸芸術館(1990年)、茅野市民館(2005年)

  - 島根県芸術文化センター「グラントワ」(2005年)



## 青森県立美術館とシアター





島根県芸術文化センター  
「グラントワ」  
石見美術館  
石見芸術劇場



### 3) 徹底した市民との協働

1999年、基本構想を創り上げるところから、設計者を選び、理想の市民館を専門家とともに設計するまで、市民主導で検討が。

2001年に公開プロポーザルで設計者を選定、140回以上のワークショップを市民と積み重ねる。

現在も、事業企画会議にNPO法人サポートCが参加、市民の意見が優先して企画が決定。

→単に市民の意見を反映するのではなく、市民とともに考え企画し実施する。互いに相応の責任を負う。



Chino  
Cultural  
Complex



# 公立から公共へ

## 1) 「官から民へ」の負の側面

経費削減の優先・ミッションの後退

事業・文芸・総務・技術の分離

## 2) 「官から民へ」の積極面

コスト意識・市場意識の発生

「自由」の拡大

他文化施設との連携の可能性

# 新しい公共へ

## 文化施設維持の公共性

### 市民参加のシステムの形成

→各地域の実情にあわせて模索

ex.金沢市民芸術村

## 資金調達の維持

→補助金に加えて、地域企業を含めた市民ファンドの  
模索が必要～明快な目的別ファンドの可能性

人材育成・ワークショップなど市民に成果が見えにくい  
事業の資金をどのように確保するか。